

交流人口を増やせば限界集落は生き残れる その拠点づくりとしての古民家再生

小原ECOプロジェクト

「毎年、お盆に行っている篝火祭も、この夏で6回目になりました。メインは能の上演で、野外に仮設の能舞台を作っています。元住民やその関係者、運営側の学生たちが集まって同窓会みたいになるんですよ」と多米淑人教授の顔がほころんだ。

福井県勝山市の山間にある小原の集落定住人口は1人。まさに廃村寸前の集落だが、集落を訪れる交流人口は年間で約1200人になる。平成18年に発足した集落の存続を考える「小原ECOプロジェクト」が、農作業体験や田舎暮らし体験などで交流人口を増やしてきたからだ。福井工大は、元住民と一緒にプロジェクトの立ち上げに携わり、活動の一環として、建築を学ぶ学生たちが集落内の古民家再生・修復活動を行ってきた。

景観保守から拠点づくりへ 古民家修復の意識が変わった

多米教授は、プロジェクトの発足当初から参加。当時は大学院生だった。元々、日本建築史が専門。谷の斜面に段々状に石垣を積んで家を建てる小原の景観は全国的にも珍しく、興味を持っていった。しかし、住民を失った家々は崩れ、美しい景観は失われかけていた。「まずは、この景観を守りたいというのがあり、建築の勉強にもなるし、とりあえず直してみようという感じでした」

以後、毎年8月の約3週間、建築を専攻する学生を中心に、教員も一緒になって修復に取り組んできた。最初に修復した民家は、以後、作業中の彼らの合宿所となった。

「4年目に、ECOプロジェクトの体験ツアーの拠点として修復した民家を使ってみたら、なかなかいい感じだったんです。それから、古民家修復は活動の拠点づくりになる、と意識するようになりまして。この頃から、活動を続ける方法、集落の在り方にも意識が向いていったよう

に思います」

集落を存続させるということ
12年目のこの夏も18人の学生が参加して修復作業が行われ、これまでに再生した民家は7棟になった。修復作業はこれで一段落となり、これからはメンテナンスが中心になりそうだ。「小原の住民が増えることは想定していません。でも、交流人口が増えて、景観や食の伝統など集落固有の文化を残していければ、集落としての意味は存続すると思います。こういう形で集落を存続させる方法もありんじゃないかと」

交流人口を増やすために課題となるのは、経済的な裏付けだと多米教授は言う。

「これまではマンパワーで何とかやってこれた。でもそれだけでは無理な段階にきているんです。今プロジェクトを支えているのは、僕たちも含めて本業は別にある人たちがばかり。プロジェクトで生活出来る人が出てくれば随分違うと思うんですが」

多米教授自身は、これからも学生たちと一緒に小原に通い続けるつもりだ。

「小原が好きだということもありますけど、学生たちにとって、いい経験の場なんです。二夏の合宿を終えると、明らかにしっかりと積極的になる。昨年は、炭焼き窯に使われていたレンガを再利用して、ずっとピザ窯を造っていた学生がいましたけど、そういう体験だっています。毎年、学生たちがこの小原で得難い体験をする、そんな活動を通じて集落が生き残る道もあるんじゃないかと思っています」



修復した民家内での集合写真

広告



福井工業大学

Fukui University of Technology

〒910-8505 福井県福井市学園3丁目6番1号 [フリーコール]0120-291-780 [ホームページ]http://www.fukui-ut.ac.jp/

